

---

# 柊と独身男

小豆色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

柊と独身男

### 【Nコード】

N6387Z

### 【作者名】

小豆色

### 【あらすじ】

喋る柊と、独身男が織りなす不思議なストーリーをお楽しみください

## 柊が恋した独身男

春、夏、秋、冬。

日本が誇る、美しい四季。

古き時代から親しまれ、愛され続けている四季。

しかし、今の日本人…いや、現代人は

四季を楽しむ気持ちが欠けているのではないだろうか？

かくいう私、牧野息吹もその一人なのだろう。

目の前には、「冬」の名を冠する柊の木が立っている。

その堂々とした、私を通さぬと言わんばかりに

覆い被さろうとする出で立ちは圧巻の一言につきる。

しかし、それ以上の感情は浮かばない。

趣がどうか、風情がどうか、私には分からない。

人の言う、感情もうすい方だ。そんな私に分かる訳がない。

しかし…。そんな私でもだ。

私でも、今日の柊が落ち着いた、和やかな雰囲気である事が感じられた。

なにか、いつもとは違うのではないか…。

そんな考えが頭をよぎる。普段なら笑い飛ばすような話だ。

しかし今は、今だけは信じたくなった。

それほどに、今日のこの柊からはいつもと違う「何か」を感じていた。

何故だろうか。こんな事は初めてだった。

知り合いの会社に入社してから早15年。

念願の研究職に就く事ができた。

初めは、研究していただけるだけで幸せだった。

夢中で研究が続けていた。仕事仲間とも仲良くなっていた。

そして、いつからか研究主任を任せられていた。

楽しかった。後悔もなかった。なかったはずだった。

でも、この木の前にいると、不安になる。

研究職に配属になった時に貰ったお祝い品の中にこの柎の苗があった。

正直最初は気が進まなかったが、育てる事にした。

あつという間に、ぐんぐんと成長し立派な木になっていた。

その堂々とした姿に励まされた事はたくさんあった。

でも、この木の前に立つと、いつも不安になるのだ。

果たして、自分は正しかったのだろうか？

それとも、仕事よりも結婚を重視すべきだったのだろうか、と…

この柎は、猛烈に家族というモノを恋しくさせた。

知り合いが少ない訳でない。女友達がない訳でもない。

むしろ、多い方だろう。これ以上は私自身も望まない。

狭くてもいいから深い付き合いがしたいと思っているからだ。

…しかし、そうではないのだ。友と家族は別物だ。

それこそ、月とスッポンよりも。

私の親は私に興味が無かった。ずっとほったらかしだった。

でも、特に不満はなかった。親への憎しみも、愛しさもなかった。

あるのは好奇心と研究欲。ひたすら大学を目指しバイトをしていた。

そして、高校卒業後は家をでて一人で暮らし始めた。

それから一度も会う事が無かった。

昨年、母がガンで倒れた。手術も行ったらしい。

しかし既に末期で、入院から一週間ほどで亡くなった。

そして、追いかけるように父が自殺をした。

それを聞いても特に何も感じなかった。

むしろ、葬式代と時間を取られる事に腹が立つたくらいだ。

それでも、そんな家族でも。友とは違うのだ。

別格、とでも言うのだろうか。

かつて、もつと純粹だった子供の頃に愛を感じれなかった私。  
趣味のみに時間を費やした青春時代。

寂しくない、といえば嘘になった。

正しかった、とも思えなかった。

家族、妻、子供…。

この年になって、今頃になって。

重要さに気づいてしまった。

でも、今更どうしろというのだ。

生殺しではないか。

「どうかしたんですか？」

考えている途中に飛び込んできた女性の声。

りん…と、まるで鈴を彷彿させる澄んだ声。

私は驚いた。ここは、私の庭。私が育てた、柊の前。

誰かがいる訳が無い。この辺りは田畑しかない。

それに、私はこの鈴のような声を聞いた事が無い。

ハッとして柊を見た。確かに、この方向から声が聞こえた。

でも、いくら柊が大きいとはいえ、人が隠れるほどの幅は無い。  
では、誰なのか。それは…。

ふつと、ばからしい考えが浮かんだ。  
まさかとは思ったが、確かめずにはいられなかった。

「柊の木…お前が喋ったのか？」

「ええ、そうですよ」

さわ…

まるで頷くかのように木の葉が揺れる。  
雪が積もった田畑を背景に、白い花が開いた柊が揺れる様は  
幻想的で綺麗だった。

しかし、木が喋る様はあまりに変だった。

「そうか…。お前、喋れたんだな…」

木が喋る。普通な驚くべき所なんだろう。  
でも、私は驚かなかった。

そんな感情よりも、嬉しさ…なのだろうか？  
愛しさとも言うべき感情が強かった。

「ええ。あなたと話す事ができて嬉しいです。  
いつもお水や手入れ、ありがとうございます」

柊…声からして女性なのだろうか。彼女が話すことに木が揺れる。  
まるで、人のように…

「そうか、それはよかった」

「はい。ところで、一つお話があるんですが…  
ちよつと、戯言に付き合ってくださいませんか？」

まるで家族と会話しているようだった。

もちろん、私の親のような、偽りの家族ではない。

心から守りたいと思う、愛したいと思う、本当の家族と。

ただの柵の木。もうそんな風には思えなかった。

彼女はすでに、私の家族だった。

しかし、改めて考えるとおかしい話だ。

もしかしたら、幻覚かもしれない。夢かもしれない。

でもそれでも良いと思う。

39歳にもなって、愛しい家族を自分から手放そうとは思わない。

娘にすら思えるくらいに愛をかけて育てたこの子を、

唯一心を許せると感じたこの子を家族と思わない訳がない。

笑うなら笑えば良い。私は、こればかりは自分勝手にさせてもらう。

「いいぞ、私でよければいくらでも付き合おう」

「ふふ…。ありがとうございます」

嬉しそうに彼女は笑った。おもわず私も笑顔になる。

こんな気持ちは初めてだ。楽しい、というのをひしひしとを感じる。

「じゃあ、一つ提案です。」

息吹さん、養子を育ててみたらいかがですか？」

それは…。

まるで、さっきの思いを聞いていたかのような提案だった。

しかし、満更でもない気分だった。

後押ししてくれている気分でさえあった。

そんな質問をする柵に、そしてそんな気持ちになっている自分に驚いた。

「…なんで、そう思った？」

動揺が声に出ている。おかしい、普段なら適当に受け流すのに。でも、そんな事よりも彼女の理由が聞きたかった。彼女はそんな私に、まるで諭すように、優しく語りかけた。

「息吹さんが私の前に立つと、何故か寂しそうでした。まるで迷っているかの様でもありました。

私も、そんな息吹さんを見て寂しくなりました」

彼女の声が少しか細くなる。

声に合わせて柵の葉が、落ち込むかのようにすこしなる。そして、その声もだんだんと泣きそうな声になっていく。

「なんで息吹さんは寂しそうなんだろう？

私にできる事は無いんだろうか？

しばらく、自問自答する日々が続きました」

どうやら、私は知らぬ間に心配をかけていたようだ。申し訳なさで情けなさが胸を締め付ける。

「そんなある日、この家の前をある家族が通ったんです。

とても楽しそうでした。そして、ようやく気がつきました。

ああ、息吹さんは家族が恋しかったんだ…と」

「ああ…すべてお見通しってわけか…」

家族が恋しい。私がここ最近思っていた事だった。改めてかなわないなあと感心する。

まるで頼りない父親を諭す聡い娘のようだった。

私よりも、よっぽど人間らしかった。



「そのあと、どうすればいいのか再び悩みました。

でも、不思議と結婚という選択肢は浮かびませんでした。だから、養子を貰えばいいのではと思いついたんです」

「…なんで、結婚が選択肢から外れたんだ？

一般的な感覚からすると、一番妥当な線ではあるんだが…」

私の質問に、彼女は苦笑いのような声をしながら、照れくさそうに、ちよっぴり恥ずかしそうに答える。

「…嫌だったんです。大好きな息吹さんが他の人に取られるだなんて」

「それは…」

そこまでに私は好かれていたらしい。

でも、とても嬉しい。心が満たされていくのが分かった。

「ま、まあ。それは置いておいて。どうですか？養子を貰うのは」

さすがに恥ずかしかったらしく、あわてて話題を切り替えた。しかし、先ほどの話を聞いた私にとって、その質問は不要だった。

「君との子供、ということだろう？もちろんいいよ」

「わ、わたしのこども…！」

赤面したようにほのかに花が赤くなり、ぶんぶんと枝をふる彼女。その様子が面白くて笑みが止まらない。

「じゃあ、早速貰うとしよう」

「あ、私女の子がいいです！」

「そうだなあ。私もそう思う。名前はどうする？」

「そうですね…。りつか…、うん、六花なんてどうですか？」

雪の結晶の俗称である六花。牧野六花か…。  
柊の子供が雪の名前…。

改めて気づく異常におもわず顔が綻ぶ。

「いいね。じゃあ、牧野六花で」

「ふふっ、楽しいです」

本当に。彼女と話していると笑みが止まらない。  
家族とは、こんなにも楽しい物なのだったのか。  
やっぱり、私は間違っていたようだ。すべてではないにせよ。

「じゃ、そういう団体に話をしてくる」

口ではそういったものの。

今時、養子を見つけるのは難しい。

この少子高齢化時代に独身男が養子を買うなんて到底無理な話だ。  
まあ、それなりにコネもあるから使わせてもらおうか。

とりあえず、一旦離れようとした。

しかし、彼女の様子がおかしかった。

「っ…！っっ、うっううう」

「ど、どうした！？」

彼女は急にうめき声を漏らした。声はとても苦しそうだった。  
何をそんなに急ぐのか、矢継ぎ早に私に語りかける。

「い、息吹さん、私はもう話せなくなります。

それからは、ただの柊の木に戻ってしまいます。

ですから…！、あ、あうっつ、う…。ど、どうか聞いてください」  
「な、なんだ？」

何が起こっているのか分からない。これから何が起こるのかも分からない。

分かるのは、愛しい家族が消える事。

唯一の、心の底から愛している家族がいなくなってしまう事。  
ただそれだけだった。

「どうか、幸せになってください…。つく…た、ただ、私の事、  
忘れないでくださいね。そんなだったら、泣いちゃいますからね」

必死で声を出す彼女の声を聞くと苦しかった。涙が出そうだった。  
でも、この子の前では泣けない。

私はもう、父親なのだ。誰がどう思おうとも。  
せめて、この子の前では立派でありたい。

「私、応援してますから…。ひ、必死に応援しますから！  
いつか、再び喋れるまではお別れです。さ、さようならあ！」

泣き声でそう伝えると、彼女はもう喋れなくなった。

しばらく呆然としていたが、やがて決心し、立ち上がった。

養子を貰うために。

彼女のための肥料を買うために。

私はこの日決心した。

絶対に、木が喋れるようになる器械を作ってやる。

絶対に、家族を助けてみせる。

初めて私を愛してくれた家族を。

そう心に誓い、歩き出した。

## 柊が恋した独身男（後書き）

いかがでしたか？楽しんでいただけたでしょうか。

まだまだ稚拙な文ですが、頑張つて雰囲気を作ってみました。  
もし、アドバイス等ありましたら、できれば教えてください。  
読んで下さり、ありがとうございました。

## 舞い散る椿と一人娘

「おとーさん、つばきだよ」

「椿だな」

椿が喋ってから早7年、この娘が来てから早2年。

私は46歳、六花は6歳になった。娘の成長ほど早く感じる物は無い。

最近「ちよつと前までは…」が口癖になってしまった。

最近の健康診断で知ったが、腰の容態が思わしくないらしい。

改めて老いというのを感じさせられる。

辛いのに抱っこしてしまうのが原因。でも可愛い娘の頼みは断れない。

親馬鹿？褒め言葉です。

多少ガタは来ているけれど、まだまだ元気。六花はもっと元気。

私たちは今、京都に旅行に来ている。

理由は簡単。この前、仕事中にぎっくり腰になってしまったからだ。

もちろん、そんな事では有休は取れない。うちの会社も楽ではないのだ。

でも、この事を心配性の部下達が社長に言ってしまったらしく。

部下達以上に心配性な社長に無理矢理有休を使わされたわけだ。

断ろうとしたが、

「そんなに有休が欲しいなら後でこっそり追加してやってもいいんだぞ？」

などとまで言われてしまい。

いやお前、親友相手だからってやばいだろ。

もつと社長らしくしろよとも思ったが、結局流されてしまった。今週は療養旅行をしてこいと、わざわざ予約までされた。

さすがに断れなかったので、春休み中の六花を連れて旅行に来ているということだ。

で、今は…

「おとーさんおとーさん！黄色の椿もあるよ！」

「おー。すごいなあ。あっちには桜まで咲いてるぞ？」

「あつ、ほんとーだ！」

深夜にホテル付近の公園で花見中。しかし、本当に綺麗だ。

桜の花びらに囲まれた椿達が咲き誇る風景。

生まれ故郷の東北や、今住む北陸には見られない、特有の風景美。決して、有名ではない公園だった。

今来たのも、偶然六花が行ってみたいと言ったからだ。

しかし。いや、だからこそ。そんな公園が凄く輝いて見えた。

都心にしてはそれなりの大きさを持つこの公園。

所狭しに桜や椿が植えられている。

周りは桜で覆われ、中には椿が咲き誇っている。

春の代名詞である桜に、「春」の名を冠する椿が織り成す景色。

私たちは、来たタイミングが良かったようだ。

ちょうど、桜の花びらが椿にまぶせられるようになっていた。

空を舞う桜の花びらの中で、きらびやかな椿の花がひとときの春を謳歌する。

ライトの光がさしこみ、絵に描いたような風景が一層に引き立つ。計算された、しかし、その中でも自然な輝きを放つ花々。

そして、その中を縫うように歩きまわる六花。

蝶が舞い、桜が舞い、春が訪れる。  
椿が咲き、子供が遊び、春が栄える。

これが本当の春なんだと、心から思えた。  
本当に、きれいだ…

言葉で表せない、そんな風景。

言葉で表そうとするなど、無粋なまねと言うものだろう。

ただ、木々の観賞は程々にしておく。

だって、柊に嫉妬されそうだしな。

その柊の話だが。

柊は、あれ以来一切喋っていない。

何度問いかけても、目の前に立つても。

それどころか、徐々に元気がなくなってきた風にも感じた。  
でも、私には何もできない。

今の器械の完成率は、23%ほど。

休日や、暇な時に少しずつ作っている。

でも、喋る為の脳部分や、喋り方が分からないため、  
コントロール部分やマスターパーツが作れない。

周りの翻訳機や外見を作るのが精一杯だった。

残念ながら、情報が少なすぎる。

せめて、他の木も喋れたら…。何度もそう考えた。

でも、喋ってくれたのは柊だけだった。

結局、あれからなにも進展していない。

娘が来たら何とかなるかとも思ったけどそうはならなかった。  
六花が来てからは二人で毎日世話をした。

それでも、柊はなにも話さなかった。

いや、話せないのだろうか。

私が昇格したときも、養子縁組の目処が立ったときも。  
娘が来た時も。娘の誕生日も。娘の入学式の時も。



娘が初めて登校する日も…

へ？娘関連ばかりじゃないかって？

気のせいだよ、うん。

さて、そろそろ六花と遊んでこようかな。  
そう思った時、六花から声をかけてきた。

「おとーさん、ちょっときてー？」

「どうした？転んだのかー？」

「ううん、ちょっとちがうの」

どうしたんだろうか？六花は椿の中心から動かない。  
ふと見ると、彼女は一本の椿の前でうずくまっていた。

「あのね、このつばきさんがね。おとーさんとお話したいって」

は…？椿が、喋ったってのか…？

いや、まさか、椿みたいな事はさすがに…

「へえ、あなたが息吹さん？」

柊とは違うが、これまた軽快な鈴の音色がした。

活発でボーイッシュな少女を連想させる生き生きとした声。  
人間のようで。うれしそうで。楽しげで。

その特徴ある声は、まさしく木の声。

「椿…。お前が、喋ったのか？」

「その通り！初めまして、お二人さん？」

「はじめましてー」

六花は和やかに挨拶をする。さすが私の子。適応力が高い。  
…ではなくて！

「柊以外にも喋れたなんて…」

「あれ、知らないの？喋らない木なんてこの世に無いのよ」  
「…嘘、だろう？」

衝撃の事実が発覚。喋れるのは柊だけかと思ってたのに…

「いや、本当に。みんな人間なんかと喋る気がないだけで」

「…マジか」

「マジよ」

「おおまじなのー」

はぁ…。六花かわいい。って、そうじゃなくて。

しかし、なんでこの椿は話してくれたんだらうか。

六花の人徳ってやつなのか。

桜が舞い散る中で、椿と話をする私たち。

でも、願っても無いチャンスだ。

ぜひ、柊の件の核心に迫りたい。

そうして、なんの考えもなしに話し出した。

「ところで、ちょっと聞きたいんだが…」

「ああ、富山の柊の事？」

「知っているのか？」

「ええ、あの“事件”はあまりにも有名よ。特に、私たちお喋りな木にとっては」

コロコロ、とまるで転がる鈴のように軽快に話す彼女。知っていたのは予想外だが、その方が好都合だ。

…しかし、どうやってここまで伝わっているのだろうか。もしか、独自のネットワークがあるのかもな。ふむ…。根から地面を介して伝えるか？

それとも、音のように空気を使っているのか。それが分ければ、だいぶ器械も作れそうなんだが…

まあ、それは後回しだ。

滅多に無い機会、有効に使わなくては。

「なら3つ、質問していいか？」

知りたいことはそれこそ、山のようにあるが。

まずは重要な事から。他は後回しだ。

「いいよ。私も、あなたになら話してもいいわ。

あはは、あの頑固者ばかりの柊が好きになる訳だ。雰囲気が違うもの。暖かい雰囲気だわ、あなた」

「そ、そうか」

そこまで素直に褒められると案外照れるな…。

とても恥ずかしいが、そう言っただけだと嬉しい。

でも、最近自分でも感受性豊かにはなってきたと思う。嬉しい、とか楽しい、とかを感じるようになってきた。

「牧野さん、変わりましたね。何かあったんですか？」

最近、そういう風に職場の部下にもよく言われる。

「何でそう思うのか」と訪ねると、

「だって、最近すごく楽しそうですよ？振る舞い方も父親みたいで  
すし」

とまあ、何とも鋭い発言を返される。

養子のこととはあまり話すことができないので、苦笑いで凌いでい  
るが。

…もう、隠しきれないのかもしれない。私も年のようだ。

そろそろ、信用できる人達にだけでも話しておこうか。

一人で背負い込むのは辛すぎる。

ついに、そう思うようになってきた。

はあ、前は何とも思わなかったのに。

これも、柊と六花のおかげなのか。

「あはは、おとーさんてれてるー」

「う、うるさい。そういうことを言うんじゃない」

くっ、む、娘にまで馬鹿にされた。

しかし、私はどうやら感情を表に出しやすいらしい。

長年の親友だけでなく、部下や六花にまで何を思っているのかば  
れてしまう。

昔は仏頂面だの冷酷だの言われ放題だったのに。

…あ、逆か。あの頃は他人に関心がなかったからか。

そう考えると、なるほど。案外分かりやすい性格なのかもしれない。  
い。

「コホン、本題に入るぞ」

「どうぞ？いくらでも聞いわ」

ま、とりあえず聞くだけ聞いてみよう。

これがなにかのきっかけになれば良いんだが…

「1つ目。木は柵のようにみんな喋れなくなるのか？」

「いいえ、違うわ。これまでも人と話す木はいたけど、彼女みたいなのは初めて。」

だから、私たちも動揺しているの。おかげでみんな口数が凄く減ったわよ」

「そうなのか…」

とすると、あの事件は木達にとってもイレギュラーな事態ということか。

これは困った。てつきり木なら解決方法や原因が分かって思っていたんだが。

しかし、なら何故、柵は喋らなくなったのだろうか。

そもそも何が起きたのだろうか。

…やはり、私が一番の原因みたいだな。

他の木が何かした訳ではないみたいだし、彼女が単に喋らないだけではなさそうだし。

となると、彼女と話した私が一番の原因…。

しかし、私は何をしたというのだ。

彼女と話し、笑い、約束をしたただけだ。

それだけでも罪なのだろうか。

考えてもしょうがない、か。

なんにしても、私は私の最前を尽くせば良い。

「ということは、他の木…特に他の柵達には影響は無い…」と

「ええ、他の柵達は普通に話しているの。あの後、人と話した勇者だっているけど、

彼女みたいになっただのはいないわ」

「おとーさん、なんのはなし？」

「ん、うちの柵の話だよ」

会話についていけず、少し寂しそうな六花に答える。  
でも、少しでも良いから理解してほしい。  
なぜなら、不安になってきたからだ。  
この事件を解決できるのか不安なんだ。  
もしかしたら、私だけでは解決できないかもしれない。  
そうしたら、柊はそのまま死んでしまうだろう。  
それが嫌だった。

本当は娘にそんなことを背負わせたくない。  
しかし、そうは言っていられないのである。

木と喋ることができる。

それは、人類だけでなく、六花にとってもメリットがある。  
特に、今こうやって椿と話している彼女には。

「ひいらぎさんもおはなしてきたの？」

「そうだ。この椿みたいだ」

「そうそう、結構人気だったのよ？彼女」

やはり、木には独自の通信方法があるようだ。

無性に知りたい…。私の好奇心が激しくうずく。

未知の事象の事を調べてみたいと思うのは科学者の本能。

体力や知力とは違って、これだけは決して衰えることは無い。

科学者：特に、マッドサイエンティストなんかがいつになっても

アホみたいに元気なのはそのせいだ。

こればかりはどうにも抑えることはできない。

自分でも、子供みたいだとは思うのだが…

はあ、我慢我慢…。今は柊のことが先だ。

「とりあえず、2つ目。彼女に何があつたのか分かるか？」

「んゝ、少しならね？」

よかつた。少しでも良いから彼女の情報が欲しかつたのだ。まさかこんな所で聞けるなんて。棚からぼたもち、いや大金だ。にしても、六花がここに来たいつて言ってくれてよかつた。彼女の勘が鋭いのか。はたまた、運命という奴なのか。それとも、椿が六花を呼び寄せたのか…

「彼女が喋らなくなつた理由。それは彼女が“木”でなくなつたからよ」

「木が“木”でなくなる…？」

「そう、私たちはこれを樹化現象と呼ぶわ。木が樹となる…。まあ私たちのようには話せなくなると考えていい。ちよつと複雑だから、よく聞いてね？」

すでに頭がパンク気味な六花を心配してか、一旦間を置く椿。私も心しておこう。ここから先は未知の世界。誰にも分からない事だらけなのだから。

「よし、じゃあいくわよ？」

樹つて言うのは、いわばさなぎのような状態の木を指すの。何かに変身する為の休息期間…。彼女はそうなつたと考えられているの。

でも、木が樹になる事は今までなかつたの。時たま、偶然そういう状態で産まれてくる木がいるだけ」  
「むうう、わからないや…」

本当に頭から湯気を出しながらうんうんなる六花。  
悪いが私でも頭がいつぱいっばいだ。  
なんとか頭で整理しながら理解しようと試みる。

「木が樹になるのは分かった。でも、樹は何になるのか？」

「残念ながら、そこまでは分からないの。  
樹が産まれる事自体、滅多にないし。私たちにも分からない事だらけ。」

おとぎ話みたいな物までもひっくり返してみんなで調べているけど、

まだ何にも分かっていないの。ごめんね」

「あやまらなくていいの。…た、たぶん？」

会話に加わりたいが為に必死に話を合わせる六花。

健気だなあ。

しかし、樹化かあ…。ということは、いわゆる羽化的な現象を起こせば良いのか。

なるほど。大体のイメージはつかめた。

なら、翻訳機じゃなくて羽化促進機が必要になるな。

とりあえずの設計図を頭の中で思い描きながら、ダメ元で聞いてみる。

一番聞きたかった、最も重要なこと。

「3つ目。彼女は永遠に樹のままなのか。木に戻ることはないのか？」

「残念ながら、さすがに分らないわ。」

ただ、樹から木に戻ることはなさそうね。一応、進化らしいから原因解明の為に爺さん達が今頑張っているけど、時間がかかるみたい。

全部分かるまで、だいたいあと3年ってとこね」



「そうか…」

やはりか…。まあ、しょうがないか。  
そこまでは期待していなかったし。  
私が頑張れば良いだけの話だ。

「えっと、ちよつといい？」

ふっと、思い立ったように六花が質問をする。  
はあ…さっきのを理解できたのか。

我が子の成長にはいつも驚かされる。  
…なんて、言っていられなかった。

六花の質問は、純粹な疑問。

しかも、普通に考えれば当たり前前の、単純な質問。

そして。

柊のことで夢中だった私が失念していた、大事なこと。

「ひいらぎさんは、“き”になってしゃべれなくなっただんだよね？」

まさかだけど、

あなたまで…、“き”には…ならない、よ…ね…？」

そう、さっきも言ったように、今回の樹化現象の原因はおそらく私。

その私と話した… そうなれば、普通に考えれば、彼女も、樹になるのではないだろうか？

「……………」

このタイミングでの彼女の沈黙は、肯定と同じだった。

それを感じ取るや否や。

凄まじい罪悪感、劣等感、自己嫌悪…

あらゆる負の感情が、後悔が、刃となって私を襲った。どうして気付かなかったのだろうか。

ああ、私はどれだけ犠牲を出せば分かるのだ。

私自身が木にとつては災厄だという事に。

「つばき…さん？どーしたの？…え、ほんとう…なの？」

六花も椿の異常に気が付いたようだ。

しかし、今の私には何もできない。

「…はあ、残念ながらビンゴよ。すでもうだいぶ辛いのに…っ！なんてことだ…」

彼女の口から漏れる、考えうる最悪の言葉。

もう、言葉すら出ない。最大級の自己嫌悪にかられる。

そんな私に、椿はやさしく声をかける。

「あはは…。隠そうと思ってたんだけど、そこのおちびちゃんに気付かれちゃった。

おかしいな、隠し通せたと思ったのに。さすが、あなたの子ね。

…ねえ、息吹。そんなに自分を責めないで。いまのは、私から話しかけたの。

いわば、自業自得なの。ねえ、あなたは何も悪くない。本当に、悪くないよ。

だから、そんなに苦しまないで…」

最初こそ明るく振舞っていたものの、すぐにふわりとした優しいげな声に変わる。

しかし、私には。柊の声を聞いた私には分かるのだ。

彼女の声が、少し震えている事を。

おそらくは、壮絶な痛みにもがき苦しんでいる事を。

「ごめん。…本当に、本当に、申し訳ない…」

もう、止まらない。涙がこみ上げてきていた。

私には止められなかった。六花の前で、泣き出してしまう。

しかしもう、体が言うことをきかなかった。

「ねえ、その手を緩めて。心を落ち着けて、私の話を聞いて？  
それとも、もう聞いてくれないの？」

手…？意図が分からず、ふっと自分の手を見る。

爪が食い込み、血が出ていた。握り締めすぎたようだ。

六花が急いで手当てをしようとしていたが、気にかける暇はなかった。

「分かった…。聞くよ。何でも聞こう」

「よかった…、っ！、う…」

なんとか悲鳴を抑えようとする彼女。もう見ていられなかった。

「椿…」

「だ、大丈夫。要点だけ伝えるね。」

3年後の夏に、愛媛の榎を訪ねてみて。きっといろんなことが分かると思う。

あ、もちろん木の方の榎ね。山のほうに、ひときわ大きな榎があるから。

道はその辺の木に聞いて、て…。！、うあつ、うつ、はあつ…」

ついに堪えきれずに悲鳴を上げる。

椿だから、表情はない。ないが…。

その痛みは、声からでも十分すぎるほどに感じられた。

「あと…っ、できれば私を柵の横に植えてくれないかし、らっ…。

ここにいても、もうしょうが、ないし…」

「つばきちゃん…うううう」

六花はついに泣き出してしまった。

私も、涙が止まらない。

ああ、人間とは、なんて無力なんだろうか。

目の前で苦しむ者も助けられないなんて…

「この問題が解決できるのは、あなた達二人であつ、くうう！…だ、だけみ、たい。」

がんばって、ね。応援してるよ！じゃ、…頼む、ね。バイバイ！」

最後の力を振り絞り、別れの挨拶を済ませると、沈黙する椿。

その前で泣き続ける私たち親子。

その時、椿の木がわずかに光ったかと思うと、一瞬で一つの花が

実を結んだ。

ふわりふわりと、桜とともに種が虚空を舞う。  
そして、周りの2つの花とともに六花の手におさまる。

ぽき…と、枝の折れる音がする。

見ると、一本の枝が根元から落ちてきている。  
まるで、自ら命を絶つようだった。

一本の枝が、椿の元に落ちる。

それはまさに、彼女が“樹”となった証。

私が、木を、またしても傷つけてしまった証。

涙が止まらない。六花も泣き止まない。

春の早朝。誰もいない公園で、私達は泣き続けた。

どれくらい泣いただろうか。

だいぶ周りが明るくなってきた頃、六花が話し始めた。

「おとーさん」

意を決するかのような声。

か細い声ではあるが、私には、とても力強く聞こえた。

「わたし、ぜったいにつばきさんをたすける。ひいらぎさんもたすける。」

おとーさんのことも、たすけるからね…」

彼女の決意。小さいながらも、すべてを守ろうとする心。

その心に、私は気付かされた。

こうしている場合ではない、と。

六花をぎゅっと抱きしめ、心に誓う。

私は、柊を。椿を。六花を。  
絶対に守ってやると。  
死んでも守る、と。

「よし、そうと決まれば富山に戻るぞ。椿を柊の横に埋めてあげな  
いと」  
「へ？う、うん！」

そうして、私達は旅行を取りやめ、急いで富山へと戻ることにし  
た。

3年後、愛媛を訪れられるように。  
椿の願いをかなえるために。  
そして、六花を守るために。

## 舞い散る椿と一人娘（後書き）

椿が歌う春編です。いかがでしたか？次は夏、榎編です。

しかし、今時きのこ以外の榎なんて知ってる人いるんでしょうか？

まあ、分からなかったら検索してください。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

## 栄える榎と娘の頑張り

夏。

子供から大人まで、暑さに疲弊させられる季節。

冬と対となり、互いを恋しくさせる季節。

そんな季節に、私は愛媛の榎と呼ばれていた。

しかし、私は今自宅の縁側にたたずんでいる。

横には大きめにカットされたスイカが、目の前には柵と榎がある。榎が柵に寄り添うように生えている。

実は、あの榎は一晚でここまで成長した。

あの後、急いで種と枝を埋めた私たち。

一晚経って見てみたら、もう榎が大きくなっていたのである。

京都で見た大きさと全く一緒だった。

不思議に思ったが、確かめる方法がなかったのでそのままである。

京都のあの公園の榎が消えたらしいから、

おそらくは特殊な移動法だったんだろう。

まったく、人には到底分らないことばかりだ。

そうやって、昔を思いつつ、風鈴が鳴る音を聞きながら

スイカを食べていたのだ。

冷たいスイカが、風鈴の音が私の体を涼める。

私は、愛媛に行かなければならなかった。

しかし、どうしても行くことができなかった。

情けない話だが、この前腰を骨折してしまった。

重たい器具を運んだ際に、足を滑らせて腰から転倒。

さらにちょうど右の腰の部分にその重たい器具が当たってしまい。

みごと、骨折になったという訳だ。全治1か月らしい。

我ながら、何とも情けない話だ。老いを感じさせられる。

でも、悪い事ばかりじゃなかった。



年齢の割に落ち着いている六花の珍しい泣き顔が見れたり。

「死なないでお父さん」と、勘違い発言が聞けたり。

部下から社長から会社総出で見舞いにきてくれたり。

堅物で気難しい先輩が一番乗りで病室に飛び込んでくれた時には

おもわず笑ってしまった。

そして、みんなの愛が感じられた。

ああ、私って愛されていたんだなあ、と。

心の底まで満たされて、温かい気持ちになった。

しかし、困った。榎に会いにいく約束はどうだろうか。

そう思っていたら、六花が提案した。

「わたしが榎さんに会いにいつてくるよ。お父さんはここでまって。

大丈夫、心配いらないよ？私に任せて！」

小さく膨らんだ胸を張りどんと叩いて、まかせろのポーズまでしてくれた。

しかし、六花はまだ9歳だ。一人旅なんてさせられない。

ただ、その他の方法がない。かといって、約束を破る訳にも行かない。

どうしようか……。そう思って会社の信頼する4人の人に相談した。すると、真っ先に新人の真衣さんが、

「先日完成したA I人形を付き添わせるなんてどうですか？」

と、提案してくれた。

A I人形とは、私と真衣さん与其他3人で自主制作し、つい最近完成したばかりのアンドロイドの事である。

私が設計し、3人が制作し、真衣さんが外見を整える。

言葉にすると簡単だが、とても大変だった。

完成間近で爆発したときは本当に挫折しそうになった。

その分、A I人形の性能は折り紙付きだった。

残念ながら感情はついていないものの、日本語と英語を理解し、自主判断能力も備え、人のように動く事ができる。

力も強く、ボディガードとしての性能も高い。

近々、特許申請も完了するそうだ。

そのでは、批評家の社長までも

「ノーベル賞も夢じゃないな…」と唸らせるほどである。

ちなみに、気になるその外見なんだが…。

女性陣の意見を反映して、モデルもびっくりの体型となっている。

顔は大人びておっとりした感じとなっていて、

微笑みが素敵なため感情がなくても十分なくらいだ。

制作者の一人の堅物先輩はちよつと引いてたな。

ただ、あの女性陣の勢いに敵うものはいないんだな、これが。

しかし、全員日本最高峰の科学者である。

駄作を作る訳がない。

自信はあった。電車経由なら行けるのかもしれない。

やくざに絡まれてもボコボコにできるだろう。

でも、それでも気は進まなかった。

…はあ、六花。無事でいてくれよ。

かわいい子には旅をさせるなんてよく言うもんだ。

本当にかわいい子は手放したくなくなるはずなのに。

結局他に意見もなかったので、A I人形と六花が行くこととなった。

まあそういうことで、私は縁側で六花の無事を祈っている訳だ。

頼むぞ、A I人形…

…あれ、もうはいつてるの？

あー、てすてす。本日は晴天なり。本日は晴天なり。  
よし、大丈夫！

こんにちは、六花です。えっと、小学3年生です。

今はお父さんのお使いで愛媛に来ています。

愛媛って言うのは、たしか、みかんがおいしいんですね。  
ただ、今は夏なので…。うーん、残念…。

…みかん、食べたいなあ。

はっ、今のも入っちゃったかな！？

あ、あの、聞かなかったことにしてくださいね…。

うーんと、あ、今は山の方に向かっています。

椿さんが言ってたので、木に聞いているんですが。

みなさん、枝で方向を指すだけでしゃべってくれません。

ちよっと寂しいです…。

でも“えーあい”さんがいるので大丈夫です！

お父さんがいなくても、ちゃんとできます。

さて、ついたようです。

一応、バスで来たんですが、平日だから人がいません。  
わたしたちだけみたいです…。

せみの声がとても大きく聞こえます。

太陽が、木の間から顔を出していて、程よい暑さになってます。  
ちよつと歩くと、とっても大きな木が見えました。

石に囲まれてますね。なんででしょう。

…え、そうなんですか？

えーあいさんによると、あれが榎さんらしいです。

榎さん、すごく、大きいです…。

どのくらいかというと、学校くらい大きいです。

とりあえず、お話ししてみよう。

「榎さん？聞こえますかー？」

わたしです、牧野六花ですー。お父さんの代わりに来ました！」

「…そうか、そなたが椿の言っていた子か」

ひゃっ、びっくりした。

こう、お腹にくるような響きのある声です。

決して大きな声じゃないんですが、ふしぎとずっしりとした声です。

ふしぎな声です。

「ふむ…。息吹という者はどうしたのだ？」

「あ、お父さんは腰を骨折しちゃって動けなくなってます。  
だから、わたしが代わりにきました」

まったく、お父さんも年なんだから気をつけないといけないうね。  
わたしがいないと本当、ダメなんだから。

「ほう、骨折か。それはまた残念な話だ。

まあいい、そなたに話そう。ちゃんと伝えてやってくれ」  
「任せてください。大丈夫です」

ちゃんと勉強してきたわたしに死角なんてない！

えっと、聞かないといけない事は…2つだね。

「じゃあ、質問です。

今回の事件で、分かっている事を教えてください」

「了解した。もうだいぶん分かってきている。

しっかり聞いているんだぞ？」

むう、子供扱いしないでよね？

わたしだって、もう小学3年生なんだから。

「今回、柊と椿が樹化した原因は彼女達が人の心を持ったからだ」

「人の心？」

「そう、人の心だ。愛しい、恋しいという思い。

息吹とやはらは、これを木に伝えるのが相当上手いようだ。

それを理解した2人は木から樹になった。

それから推測する我らの結論は、

樹は人に進化する為の段階であった、ということだ」

えっと、つまり、愛は人間だけの気持ちで、木は普通持つてなく

て、

でもお父さんがそれを伝えちゃったから、樹になった…。

…ってことだね。

「じゃあ、樹は人になるの？」

「いや、それはない。」

樹が人になる事は生物論的にも、現実問題としてもあり得ない」

へ？じゃあなんで木は樹になるの？

人になれないのに、人になる為の準備をするなんて。

…え、えっと、“むじゅん”ってやつだね。

「えっと、おかしくないですか？」

「そう、かなりおかしい。我らだって疑った。

まあ、生物とはいつの時代もそんなものだ。

矛盾にまみれているものこそが、生物だからな。

ただ今の場合、木から追放されたと言ったほうが良さそうだがな  
人に近くなったから、貴様らはもう木ではない…。

そう言われている気もする」

「む、むう」

はあ、もう訳が分かんないよ。

とりあえず、えーあいさんにメモを頼んでおこう。

理解なんてできないよ…。

…よし、次の質問に移ろう。

わたしの得意分野の機械関連！

「次の質問です。

これならわたしにも分かるので、ちょっと張り切っちゃいます。

えっと、この設計図についてなんですけど…」

必要な器械である翻訳機、羽化促進機、そして感情移動機の  
三つの設計図の改良点や、アドバイスについての質問です。

とりあえず、今の話で翻訳機と羽化促進機は使えないと

分かっちゃったので感情移動機についてだけ質問しようと思います。  
す。

「感情移動機、精神を移動させるための器械の設計図です。移動した精神はえーあいさんのような人形につける予定です。現状では、これが精一杯です。」

樹を人にするのはどうやっても無理なようなのです。

でも、これを作る為の情報が足りないんです。

ちよつと教えてください」

「精神の移動……。なるほど、あの男も考えたものだ」

ふふーん。残念ながら、それは違うのです。

わたしだって、遊んではかりじゃないんです。

細かい所はもちろんお父さんがしたんだけど、アイデアはわたしのもの。

もうお父さんを肩を並べていると言っても過言じゃないんですよ？

「ざんねーん。この器械を考えついたのは、わたしでした」

「ほう、本当か」

「本当なのです。どうですか？びつくりしたでしょー」

「はは、本当に驚いた。いやはや、鳶が鷹を産むと言うか……」

良い娘を持ったものだな。ちゃんと親孝行してやるんだぞ？」

「えへへ」

言われなくても、お父さんはわたしが守ってあげるの。

もちろん、柊さんも椿さんもね。

ぜんぶわたしに任せなさい！ってことです。

「よし、では手直してやろう。まずはここがこうで……」

「あ、あー。でもそうじゃないと、ここが動かなくなっちゃうから……」

その後、榎さんと2人で、設計図の足りないパーツを埋めていきました。

日陰でえーあいさんが必死でメモする音が聞こえます。  
こつこつ…と、軽快に跳ねるボールペンの音が心地よく、  
話もトントン拍子に進みました。

あまりに夢中になっちゃって、お昼を食べ忘れたのは残念でしたけど。

どのくらいでしょうか、だいぶ日が落ちてきた頃に、設計図が完成しました。

「ふ、ふうう。完成です！」

「ふむ、これなら大丈夫だろう」

わたしが考えた案を、お父さんが設計図にして、榎さんが修正した、

精神移動器の設計図。

感情移動機からだいぶ形が変わっちゃったけど、性能も完璧！

…まあ、理論上はそうなんだけどね。

こればかりは、やってみないと分からないな。

「…六花さん。最終バスの到着まで、あと20分です」

「え、本当！？急がないと！」

そういえば、もう暗いもんね。お昼も食べてないのに…

いいや、後でえーあいさんになにか貰おう。

「そうか、それなら急がねばな。よし、お前さんにこれをやろう」

「ふえ、なんですか？」

夕日を浴びて赤く染まった榎がかすかに揺れると、



榎の実が一本の枝ごとがわたしの手に落ちて来た。  
あれ、こんな事前にもあったような…

……、！

「え、榎さん！」

「どうした？」

これって椿さんのときと同じ…！  
わたしは急いで榎さんの方を見る。  
榎さんも、ああなっちゃうの…？

「これ、これって。榎さんも、もう…」

「そうだな、もうこの体はダメだ」

「…うっ。ううう…」

ああ。なんで、なんで榎さんまで…  
そんなの、そんなのいや。いや…いやなのに…

「ああ、泣くな泣くな。安心しろ。我は死なん。  
お前さんが、それを埋めてくれたらな」

「へ…？」

「何年生きてきたと思っているんだ。対処の方法ぐらい知っている。  
まあ、とにかくそれを自宅に植えろ。あとはお楽しみだ。  
さあさあ、バスに遅れるぞ」

う、うん？どういうことなんだろう？  
でも、この様子なら大丈夫なのかな。  
…いや、大丈夫。わたしが信じてあげないと。  
本当の事も嘘になっちゃうよね。

「本当に、大丈夫だよね？」

「もちろんだとも。心配するな」

「…うん、信じる！じゃあね、榎さん。」

えーあいさん、ごめんなさい。連れて行ってください」  
「了解しました。しっかり掴まっけていてください」

えーあいさんは辞書ぐらいに膨らんだメモ帳をしまつと、  
ひよいとわたしを背負って走り出した。

…あんなに話してたんだね、わたし。  
後で謝っておかないと。

「榎さん、お元気で」

「うむ、お前さんこそな」

榎さんは、満足そうな声で返事してくれた。

優しい人だったなあ、榎さん。

また会いたいな。

でも、さっきのお楽しみって何だったんだろう？

ああ、早く帰りたいなあ。

お父さんも喜んでくれるか、な…。

疲れて眠っちゃったわたしを、

えーあいさんが家まで連れて行ってくれました。

ありがとうね、えーあいさん。

ありがとうね、榎さん。

## 栄える榎と娘の頑張り（後書き）

さて、夏編も終了しました。

次は楸編です。

このお話を読んで、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。  
閲覧ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6387z/>

---

柊と独身男

2011年12月25日17時55分発行